

30. 腰椎前方固定についての指定発言

○渡辺 英詩 (渡辺整形外科)

当院における過去10年間の、腰椎前方固定術症例の計数についてスライドに示した。

手術適応は、当院としての諸々の条件をふまえた上で、厳しくしてあるが、分離迂り症、中心性巨大ヘルニア、椎間板変性高度で著しい不安定腰椎等に対しては、積極的に前方固定術を行っている。

すでに本術式の大部については、同門の諸家は、略々一定した完成されたものを持って居り、夫々、小さな工夫、マイナーチェンジを考慮して術式の改良が行われているものと思う。

私のところでも、一つの工夫として、移植骨を腸骨から採取するのに、キールボーンを利用した方法を試行している。即ち、腸骨皮質を含めて、所要の大きさにボンソーで直取りする。欠損部と同一サイズのあらかじめ採形製作したキールボーンを打ち込み、しっかり補填する。この方法の利点は、手術時間が短縮されること、腸骨の力学的に最良の部分の量的にも多く採取出来ること及び、外観上の補正に良好なことである。これまでの症例では、術後、局所の特に忌わしい臨床上的併発所見は、全くない。

31. 腰椎前方固定についての指定発言

○竹内 孝 (国立習志野)

昭和41年より昭和56年末迄、腰痛疾患に対して、TAD 63例 EPD 269例、後方法145例行った。EPD は、昭和41年1例昭和42年8例昭和43年30例で、以後殆んどEPD を行っている。侵入法は中央切開で入り容易で、椎間部位はL₄₋₅ L_{5-S1} が大部分。合併症は、EPD では ileus, dry ejaculation はなく、血栓性静脈炎は8例である。考慮すべき例は、肥満な人、多経産婦、内臓を手術した人である。

32. TAD に対する指定討論

○大井 利夫 (上都賀)

TAD の手術適応につき、文献的、経験的に検討を加え発言した。最近 TAD の適応とされる腰部椎間板ヘルニアを始め、種々の疾患の病態についての新しい知見が報告されて来ている。これらの知見に基き、本手術法を再検討し、厳格な適応と手術手技の改善を図る為には、適応疾患の病態生理因子に対する臨床的、臨床基礎的な研究、考察が更に必要で、それが TAD の発展と

確立に導くものと考え若干の私見を述べた。

33. TAD の問題点

○土屋 恵一 (県立佐原)

次の症例では、TAD の適応が疑問となる。

1) L₄₋₅ 椎間: a) 女性。左総腸骨静脈の走行が骨盤腔内で外方に深く張り出しているため、b) X線上ヤコビ線が L₄ 椎体にかかる例では総腸骨静脈分岐部が上方にあり、共に静脈を右に圧排する術中操作により Thrombophlebitis を合併する危険性が大である。

2) L_{5-S} 椎間: ヤコビ線が L₅ 椎体にかかる例では L_{5-S} 椎間に分岐部が位置し、手術操作が非常に困難となり偽関節を作る結果となる。

34. 骨病変への Single Photon RCT の応用について

○梅田 透, 高田典彦, 保高英二
(千葉県がんセンター)
油井信春 (同・核医学)

RI を用いた横断々層測定装置を用い通常の骨シンチグラムで集積のみられた75症例について RCT (Radio-nuclide Computed Tomography) 像を求めた。(結果) 1. RCT は頭蓋、顎、背椎、骨盤など解剖学的に複雑な部位の骨病変の描出に有効であった。2. 長管骨病変では、病変内部の RI の集積病態が明らかになった。3. RCT は X線 CT と比較し、骨病変の動的変化の把握に有用と考えられた。4. 電算機を介して CT 情報との相互利用も可能であった。

35. Custom prosthesis の術後機能評価

○高橋 和久 (千大)

1971年以来、Mayo Clinic にて行われた custom 股関節置換術98例、custom 膝関節置換術症45例につき、臨床的及び歩行分析による客観的機能評価を行った。Custom prosthesis は現在でも実験的段階にあり、厳密なる患者の選択が必要であるが、切断術に替わる新しい患肢温存の治療法として良好な結果を得た。また、歩行分析は上記患者群の関節機能の定量的評価に関し、有用であった。

36. 我々の軟部悪性腫瘍の治療法

○保高英二, 高田典彦, 梅田 透
(千葉県がんセンター)

我々は軟部悪性腫瘍に対しては分化型の脂肪肉腫を除

いて全例 systemic chemotherapy を行っている。又、WHO の staging 分類と治療法について試案をもって行っている。即ち、Stage Ia, IIa に対しては、準切除術後、術後照射を行い Stage Ib, IIb, IIIa については、術前照射後に準切除術を行っている。一方、Stage IIIb, c, IVa, IVb (G₁, G₂) については、切断術の適応と考えている。

37. 最近10年間の転移性骨腫瘍の検討

○小林健一, 篠原寛休, 藤塚 光慶
住吉徹是, 永瀬讓史, 佐久間 博
(松戸市立)

過去10年間、当院整形外科にて入院治療を行なった転移性骨腫瘍患者43例について調査した。内訳は男20例、女23例で脊椎転移が40例と大部分を占めていた。原発巣の判明した症例は34例で、胃癌、乳癌、肺癌、腎癌が上位であった。骨転移より1年以上生存した症例は17例(40%)で、骨転移後も進行の緩徐な癌は治療法の選択により、一時的にせよ退院が可能となることより、今後とも症例を選んで積極的に治療にとりくみたい。

38. 鹿島労災病院開設以後の現況

○黒田重史, 坂巻 皓, 渡部恒夫
雄賀多聡, 松岡 明
(鹿島労災)

鹿島労災病院開院より昭和56年11月30日までの6カ月弱で外来患者総数は1458名、入院患者総数は119名である。手術件数は100例で、このうち Spine Surgery は15例である。その他肩関節腱板修復術5例、足関節靭帯修復術7例が他に比べると多いのが特徴的である。造影検査は80例でこのうち22例が肩関節造影である。興味ある症例として骨折に合併した脂肪塞栓症、Myodil による胸髄部の Olema、及び Redundant Nerve Root を供覧した。

39. 千葉リハビリテーションセンターにおける診療の現況

○村田忠雄, 上原 朗, 山中 力
石田三郎, 東山義龍, 野平勲一
中村 勉 (千葉リハセンター)

昭和56年4月にオープンした千葉県千葉リハビリテーションセンターは、肢体不自由児施設(愛育園)、肢体不自由者更生施設(第一更生園)、内部障害者更生施設(第

二更生園)から構成されている。診療は診療部、訓練治療部、検査部、看護部、薬剤室に分かれて業務が行われ、診療局が統括している。昭和56年10月31日現在入園している障害児は66名、障害者は54名であるが、今回開設以来の診療の状況を報告した。

40. 国療千葉東脊椎脊髄センターの現況

○大塚 嘉則, 三枝 修, 南 昌平
磯辺啓二郎
(国療千葉東脊椎脊髄センター)

国療千葉東病院に整形外科的脊椎、脊髄疾患を専門に扱う部門が作られたのは昭和54年7月である。同年11月の外来診療開始後の側彎症を中心とした外来患者数は56年11月末までに延1,887名に達した。昭和56年2月の病棟開棟以来11月末までの入院患者は59名で19歳以下の小児脊椎、脊髄疾患は51名を占める。手術は38件で17件の Harrington 手術をはじめ脊椎手術は27件を占める。千葉大学附属病院整形外科へは7名の入院患者が転院し、逆に大学からは5名が転院してきた。手術等に際し大学から支援を受けた医師の数は延73名におよぶが、同期間の当科スタッフ3名が、大学外来診療、手術等に加わった延数は約100名にあたる。当科の患者数は側彎症学校検診の普及とともに月ごとに増加しており、今後とも大学病院と密接なつながりを保ちながら、大いに発展することが期待される。

41. 15歳男子にみられた肘内障の1例

○望月 真人, 守屋秀繁, 三枝 修
亀ヶ谷真琴 (千大)

最近我々は、15歳男子の肘内障を観血的に治癒せしめた1例を経験した。単純X線所見で、上腕橈骨関節腔の開大。メトリザマイドによる関節造影にて比較的著明な嵌入物陰影が認められた。治療は、徒手整復を試みるも困難であり、観血的整復術を施行した。手術所見にて嵌入物は輪状靭帯であることを確認、また輪状靭帯には断裂は認められなかった。本邦報告例は少数であるが、本症例と比較すると、いくつか異なる所見があるので若干の考察を加え報告する。